

地域ボランティアとニーズ型コミュニティ

東京都における新時代の安全安心戦略検討会

2019・08・27

東京都庁第一本庁舎北塔42階 特別会議室C

文京学院大学・古市太郎

tfuruichi@bgu.ac.jp

本日のアウトライン

1. 一般社団法人A／学習支援
2. フミコム ／中間支援施設
3. まちラボ ／地域拠点
4. まとめ ／地域ボランティアとコミュニティ

東京都文京区



1. 一般社団法人A／学習支援



アプローチ：参与観察

- 期間：設立から現在に至るまで**6年間、現在に至る**
(2年間・任意ボランティア団体／4年間・一般社団法人A、以下A)
- 参加頻度：**毎週火曜日、隔週で4地区視察**
- 役割：**副代表**
面談(講師スタッフ・親子)、スケジューリング、講師スタッフと子どものマッチング、毎週のミーティング準備、エリア訪問、研修講演、相談、年度の報告書作成など

任意団体設立時(2012)の状況

- 「子どもの貧困」への政府の無関心(当時)
- 区からは取り次いでもらえず
- 地域福祉コーディネーター(以下、CSW)の実感と統計資料に出てこない日々の問い合わせ
→当時の代表の意図を組んでもらい、設立の準備へ
(4人:70代1名、50代2名、報告者)

CSW(Community Social Worker)とは

→住民等からの相談を受け、地域の中へ入り、
地域の人々や関係機関と協力して課題を明らかにし、
解決の方向に向けた支援(個人支援・地域支援)をする

1. 複雑な課題の交通整理
2. 課題の予防対策→そのための共助の仕組みづくり

1年目—2013年3月・スタートアップ(2012年9月頃から準備)
／2年目—2014年分岐点・一般社団法人化への道

ヒト：ボランティアスタッフ及び対象となる子どもの獲得
→文社協を通じた民生委員などへの口コミ

場所：駒込地区の中で、勤労福祉会館、神社の社務所などで開催
→流浪の身

資金：文社協のスタートアップ資金・10万円(当時)

回数：隔週土曜日(月2回) / 講師&事務スタッフ10人・受講生8名・年間32回

課題：①場所の不安定さ
→「場所A」で、毎週土曜日開催

②子どもの募集(個人情報管理)
→法人化し、2014年度から施行される生活困窮者自立支援法・
学習支援委託事業に申し込む→採択

一般社団法人Aの設立目的とは

「当会は、意欲がありながら、家庭の経済的事情等により、学習塾等へ通えない生徒の学習支援と、貧困の連鎖を断ち切ることを目的として設立された法人です」(定款より)

3年目—2015年委託業務1年目・地縁組織との連携

ヒト：区の委託業務となったことで、行政による安定的な募集が可能に(区報による通知など)

場所：駒込地区・場所A
富坂地区・場所B(連合町会長の推薦)

資金：委託業務費による安定的な運営へ(400万円台)

頻度：火・金・土の開催へ

課題：二年目の課題は大方、解決される

特徴：CSWの伴走による「地域情報」の入手、
民生委員及び町会との連携構築

受講生の状況

- クリスマスケーキ
- 都バス
- エアコン
- 面談
- 社会的コミュニケーション

4年目—2016年3地区・音羽地区で開催
／5年目—2017年4地区・湯島地区で開催

展開理由：駒込及び千石地区へ通えない子供の存在

場所：音羽地区・場所C／本富士地区・場所Dで開催
→CSWの伴走と、新地区展開のための下交渉により結実

頻度：四地区展開となり、
月・火・木・金・土で開催可能となる(週5日・6回開催)

特徴：4年目に、二代目代表として行政経験者が就任
報告機会の増加
→民生委員・保護司会・フミコムでの講演

6年目—2018年地域食堂の開催

ヒト：講師スタッフ43名／事務スタッフ6名
／受講生70名弱(毎年10名程度高校進学)

資金：1500万円台に(二代目代表による交渉と翻訳)

場所：駒込地区・場所A、富坂地区・場所B、
大塚地区・場所C、本富士地区・場所D
→4地区開催へ

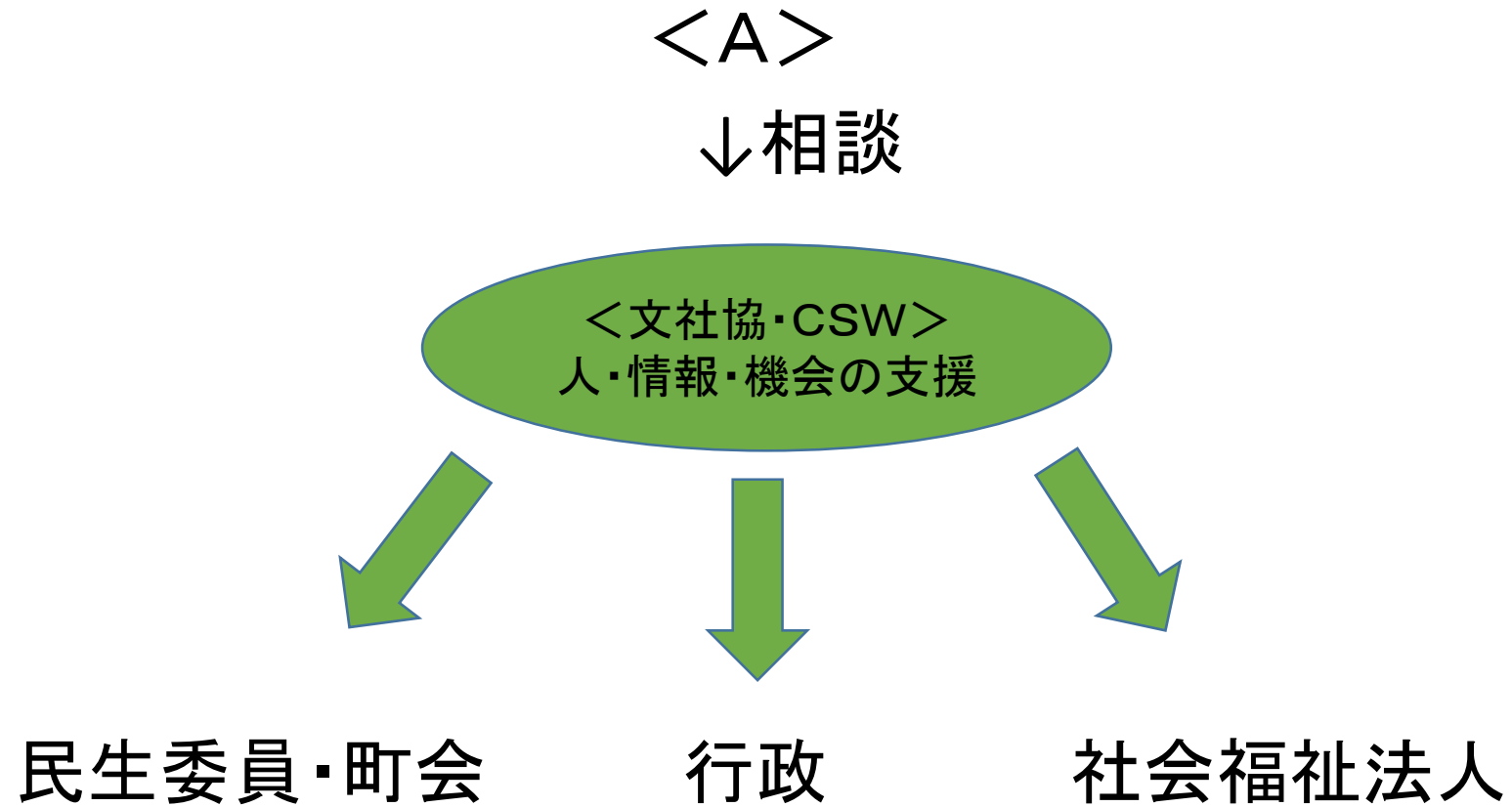
展開：上記4地区の会場で「地域食堂」開催
→前年度の講演を契機に、民生委員からお手伝いの希望が出る。
駒込地区・月一回／大塚地区・月一回／本富士地区・月一回
／富坂地区・年一回

開催数(4地区合計)：学習支援・年264回／地域食堂24回

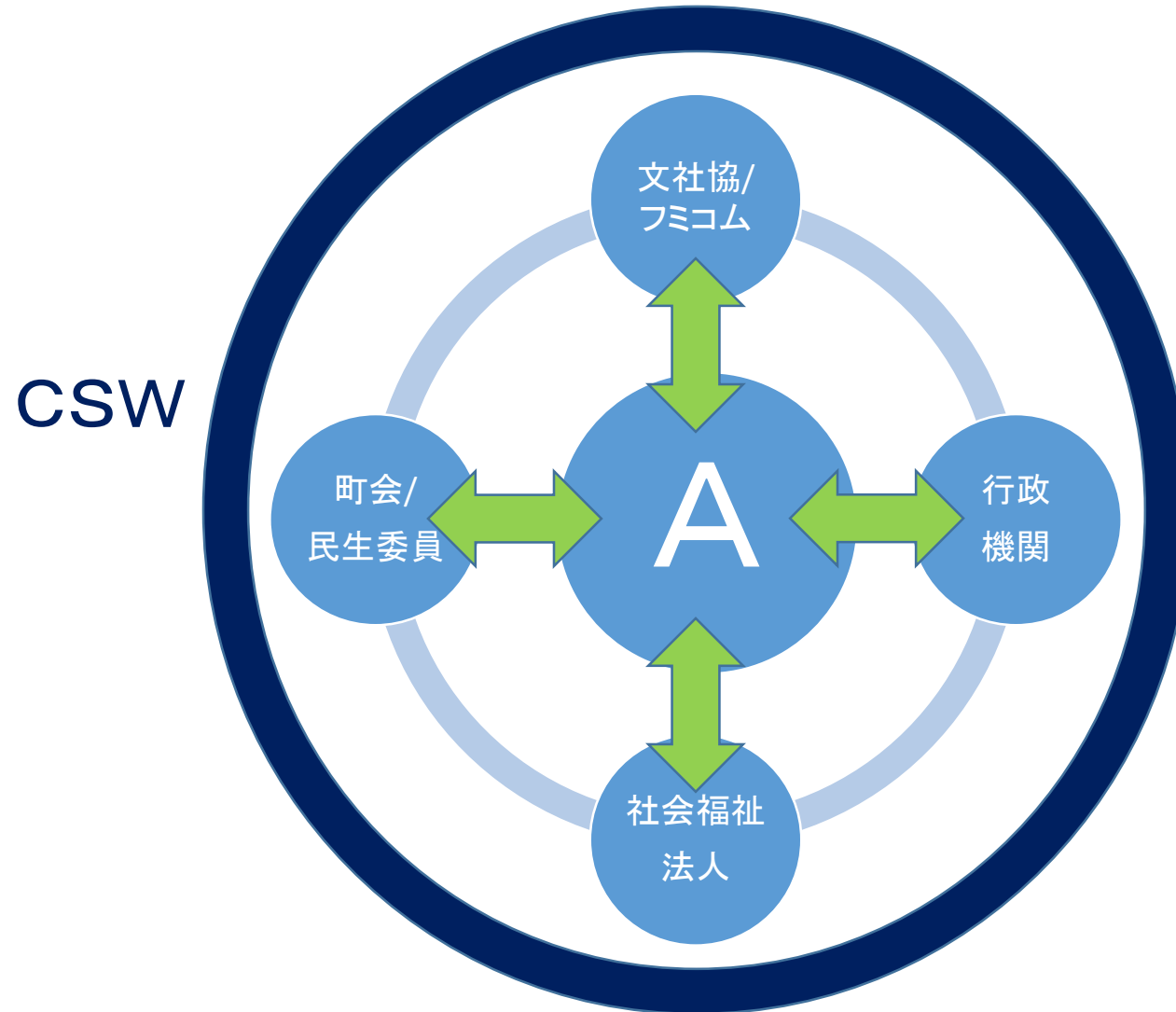
場所と時間帯(2019年度)

曜日	地区	場所	午後A	午後B
月曜日	大塚	場所C	17:00~20:00(小・中)	
火曜日	富坂	場所B	16:00~18:00 (小のみ)	18:00~20:00 (小・中)
木曜日	大塚	場所C	17:00~20:00(小・中)	
金曜日	富坂	場所B	16:00~18:00 (小のみ)	18:00~20:00 (小・中)
金曜日	本富士	場所D	17:00~20:00(小・中)	
土曜日	駒込	場所A	13:00~15:00 (小・中)	15:00~17:00 (中のみ)

法人化前後での関係図



6年目を迎える関係図



Aによるサービスが継続的な公共サービスとなっているのは？

→単純に、A が委託業務を受けたことだけではない。

関係機関のそれぞれの「強み」の活用がポイント

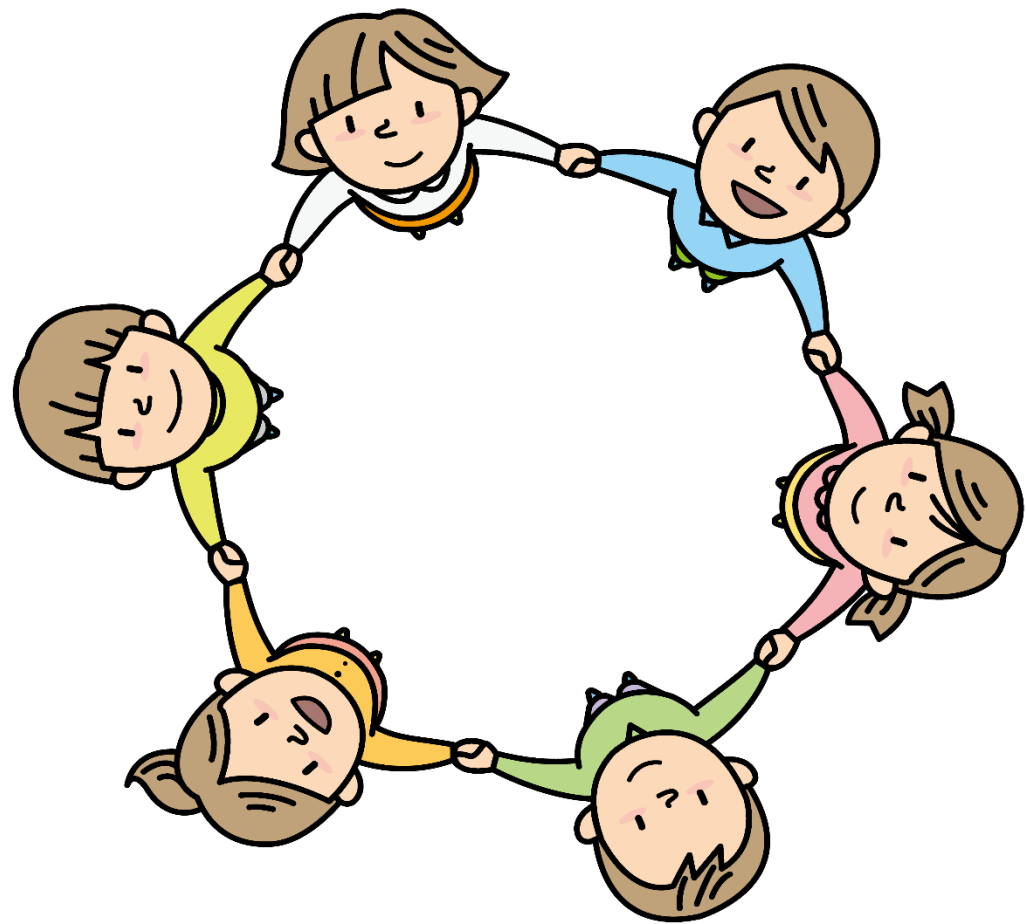
1. 一般社団法人A: 学習支援に専念
2. 区: 資金・個人情報の管理・プレスリリース
3. 文社協: 地域情報・資源の保有と活用
4. CSW: 民生委員・町会及び社会福祉法人との連携と活動への巻き込み

小まとめ

地域課題を、行政や専門機関に外部化するのではなく、「地域の限りあるヒト・モノ・カネ」を「内部化」＝「地域内でやり繰りすること」が地域協働のひとつの形

→地域ニーズを共有した「ニーズ型コミュニティ」

2. フミコム／中間支援施設



問題背景

- 地域協働への機運の高まり(古市 2012)

1969年の「コミュニティ政策」の反省を踏まえ、
2005年以降、地域協働、つまり「テーマ型コミュニティ」と
「エリア型コミュニティ」の協働の重要性が指摘され、
その実践が試みられている

東京都文京区（以下、区）の取り組み

- 2010・6 文京区基本構想
- 2011 「新たな公共の担い手専門家会議」設置
- 2012・4 「文京区と新たな公共の担い手との協働の推進」提言
- 2013-15 「新たな公共プロジェクト」
地域課題の解決を図る新たな公共の担い手を創出する
「新たな公共プロジェクト」が打ち出された。

文京区社会福祉協議会(以下、文社協)の取り組み

1. **2004年度から**、ボランティア・市民活動センターと改称し、福祉分野を中心としたボランティア・NPO団体の支援が行われ、ボランティア活動推進に一定の成果をあげてきた。
2. **2012年度から**、地域福祉コーディネーター(以下、CSW)が、アウトリーチによる地域課題の把握と解決に取り組む。

新たな取り組み(文社協 2018a,2018b)

- 2016年度から、文京区区民センターの改修を契機にスペースを拡充し、区と文社協が連携して、ボランティア支援、新たな公共の担い手育成支援、団体の持続的な発展支援などを一体的に行うことにより、積極的なネットワーク構築を図り、社会課題の解決の一助になることが目指される。

→「中間支援パワーアッププロジェクト(2016年度4月から8月まで)」

「開設準備委員会(2016年度9月から3月まで)」

課題の提出(区 2018)

: 「文京区新たな公共プロジェクト成果検証会議報告書」(以下、報告書)

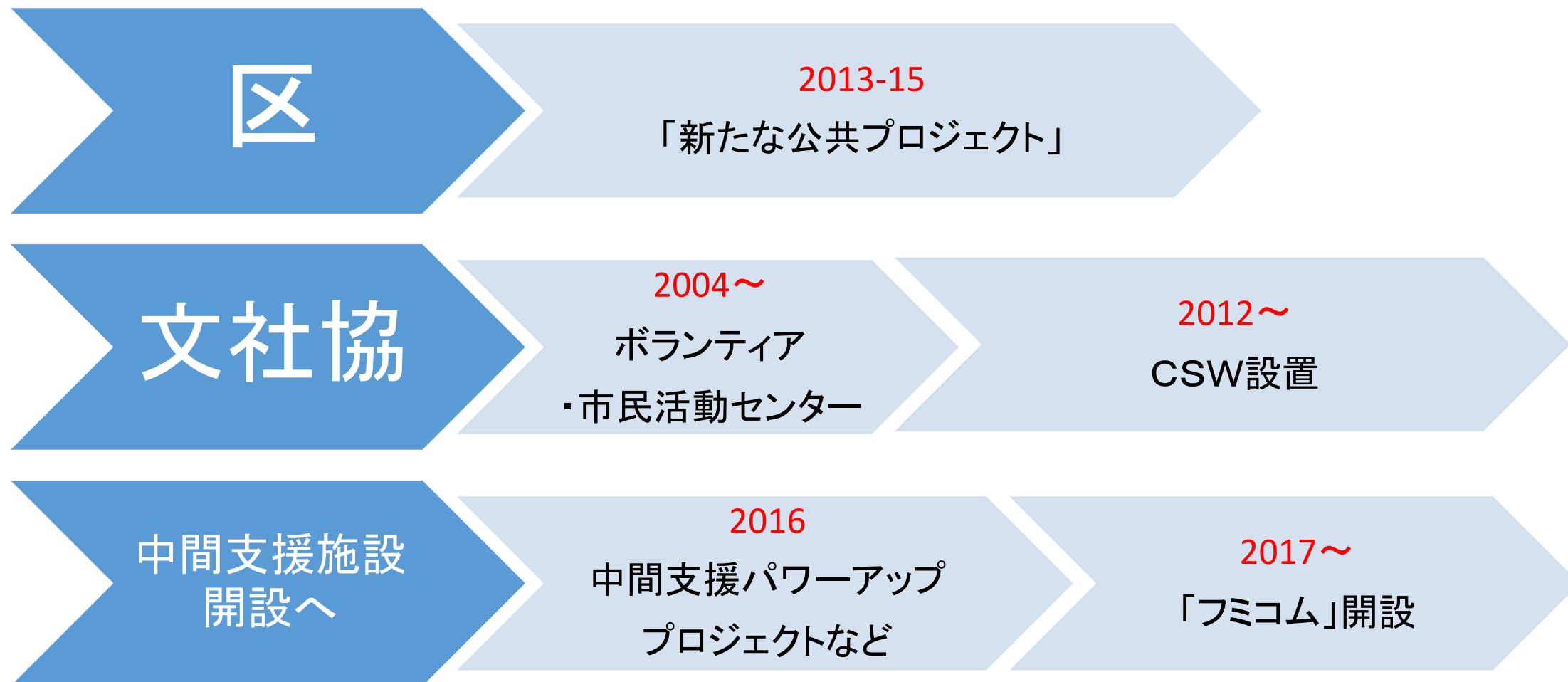
• 以下の二点に注目

1. 地域で生まれた活動が「継続的に質の高い公共サービスを提供する」状況にまで至りませんでした。

2. 既存の地縁組織(町会、自治会)、NPO及び企業と新たな公共の担い手とのつながりが十分とはいえません。

→現在においても、「地縁組織つまりエリア型コミュニティ」と「市民組織つまりテーマ型コミュニティ」の協働の難しさ、また地域で自生した活動が「公共性」を担うことの困難さが報告されている。

区と文社協の協働





中間支援施設を、文社協が受けた意味と特徴

- 生活/地域課題へのシフト
→狭義の福祉から広義の福祉へ
- 地域ネットワークの充実
→町会・自治会、民生委員とのパイプ
- 地域特性の熟知
→長年のボランティアまつりや相談業務からの蓄積
→その体現者がCSW

小まとめ

- 地域連携ステーション(通称フミコム)

「新たなつながりを創出し、地域の活性化や地域課題の解決を図るための協働の拠点」の体現化を目指す

→ ヒト・モノ・カネ・情報の支援とマッチング

Aによるサービスが継続的な公共サービスとなっているのは？

→単純に、A が委託業務を受けたことだけではない。

関係機関のそれぞれの「強み」の活用がポイント

1. 一般社団法人A: 学習支援に専念
2. 区: 資金・個人情報の管理・プレスリリース
3. 文社協: **地域情報・資源の保有と活用**
4. CSW: **民生委員・町会及び社会福祉法人との連携と活動への巻き込み**

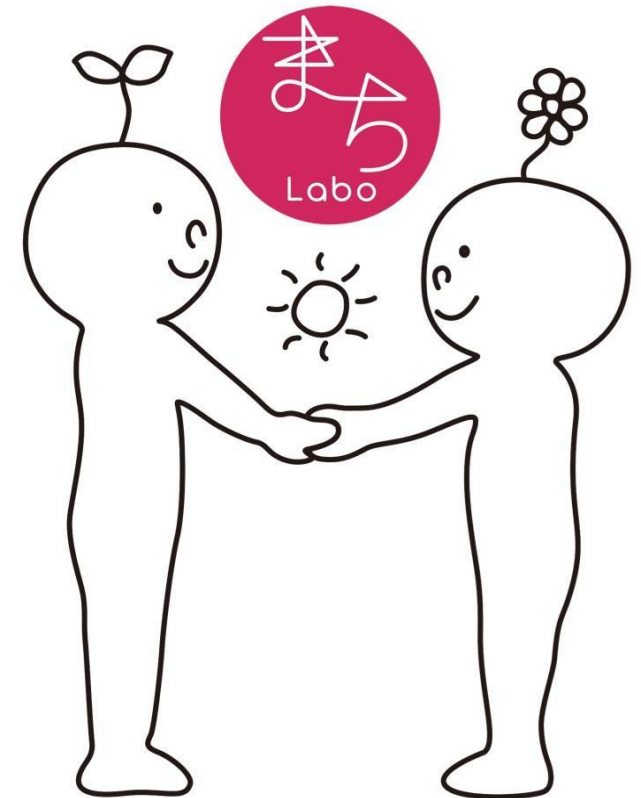
注目！

☆ 「提案公募型協働事業（Bチャレ）」
（課題解決部門、地域活性化部門）

→30年度地域活性化部門：ゆしまごころ実行委員会

地域誌「ゆしま子育て新聞」作成を通じて、地域をつなぐ

3. まちラボ／地域拠点



まちづくり研究センター(通称 まちラボ)

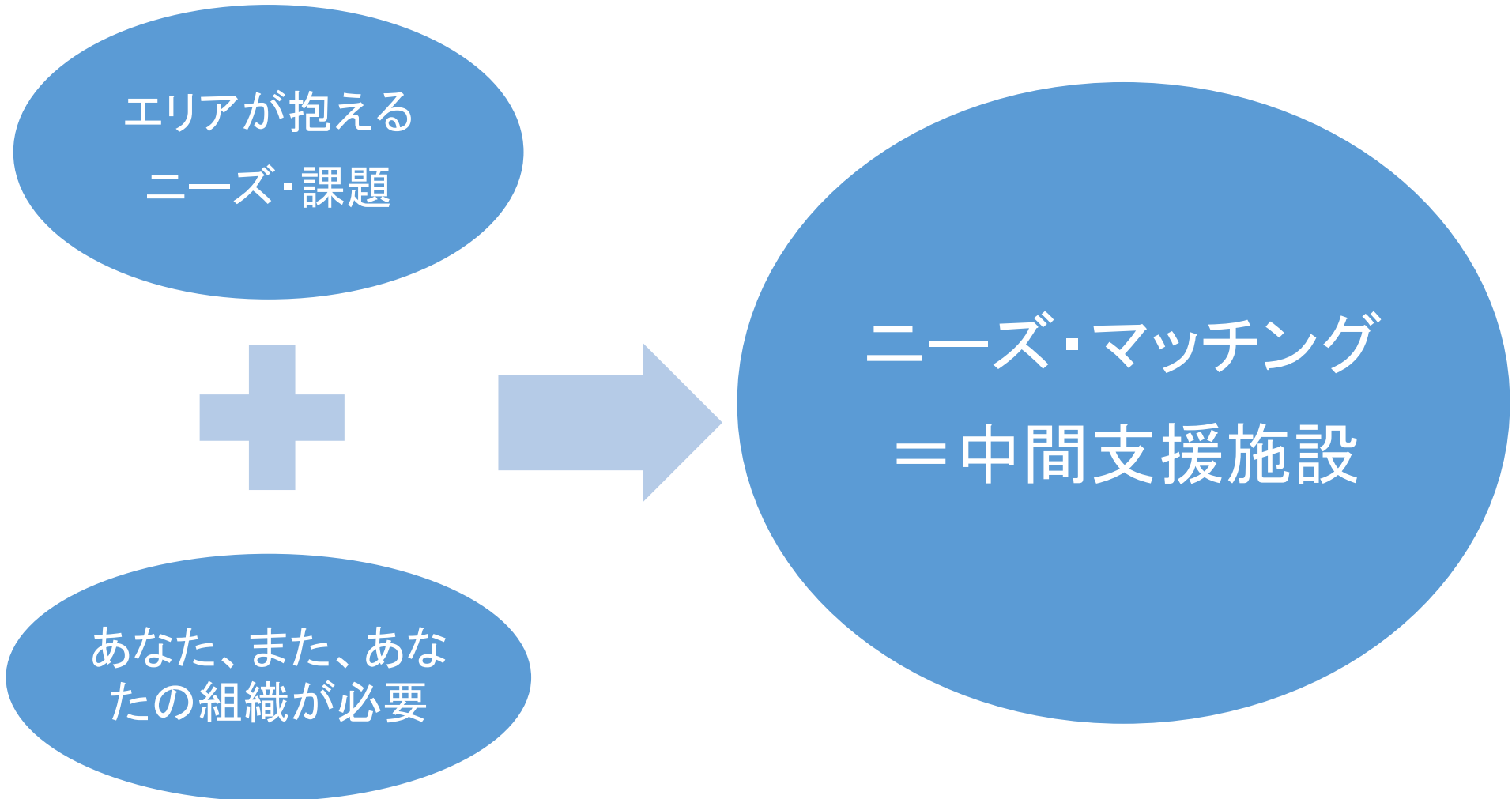
「まちラボ」は、本学の建学の精神「自立と共生」に基づいた共生社会の構築を理念とし、**社会問題、特に社会的「距離・不平等・格差」の解決を目指します**。学生主体の下、「**産官学民**」の体制で国内外での社会貢献型プロジェクトの企画・運営に取り組みます。学生には、「地域社会」や企業と連携して社会経験を積む「社会への窓口」となり、同時に、学生・教員・地域・企業をつなぐ「**結節点(ハブ)**」となります。

<https://www.u-bunkyo.ac.jp/center/machi-labo/>

4. まとめ／地域ボランティアとコミュニティ



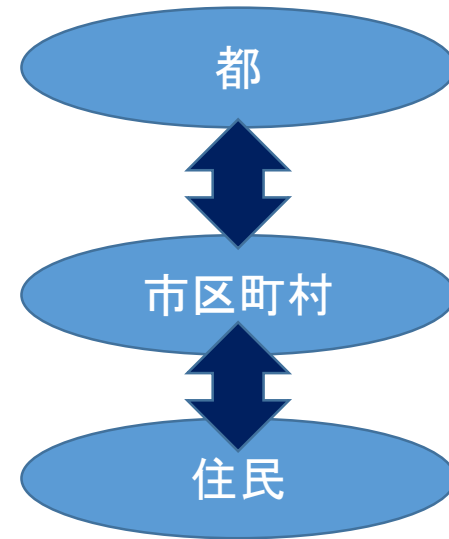
ニーズ型コミュニティ



数少ない提言：プラットフォーム

- 「生活/地域課題」から地域住民を結びつける
- 「生活/地域課題」は一律ではない
→ そのためのプラットフォームづくり

例 学習支援・地域食堂



地域ボランティア・・・生姜系？ 山芋系？



引用・参考文献

- 1)佐藤郁哉:フィールドワーク増訂版 書も持って街へ出よう,
新曜社,(1992)2013,p.159.
- 2)古市太郎:コミュニティの再創成に関する考察—新たな互酬性の形成と場所
の創出による地域協働—,早稲田大学モノグラフ,2012.
- 3)文京区社会福祉協議会:中間支援パワーアッププロジェクト委員会資料及び議事録,2018a.
——:開設準備委員会資料及び議事録,2018b
- 4)文京区新たな公共プロジェクト事務局:
<https://www.city.bunkyo.lg.jp/sangyo/kyodo/kyoudou/aratanakoukyouteigengo.html>
(2019/0825確認)
- 5) 一般社団法人A:活動報告書,2019.
- 6)文京区社会福祉協議会 地域福祉コーディネーター報告書
<http://www.bunsyakyu.or.jp/publication/coordinator/>(2019/0825確認)
- 7)古市太郎:エリア型コミュニティからの地域協働,
文京学院大学人間学部紀要,vo118,pp.9~24,2017.

ご清聴ありがとうございました

